

【目的】我が国の急速な高齢化に伴い、老若男女全てが心身共に自立した共生の社会環境づくりが望まれている。「老い」に対する関心を高め、将来への不安要素を認識し、高齢化への健全な受容方法の具体的検討が重要である。この一端として今回学生と社会一般の「老い」に関する意識調査を実施し、世代間の相違を中心に検討を試みたので報告する。

【方法】1997年4～10月、西播地域（兵庫県）在住の24～83才の男女123名（成人群）および本学学生108名（学生群）対象にアンケート調査を実施。主な調査内容は、「老い」のイメージに係わる言葉、老化の生理的兆候、特に食生活面では食品の種類・使用頻度、食意識、食に係わる不安要素、さらに総合的な将来への不安要素など。

【結果】「老い」のイメージでは学生群は元気、たくましい、チャレンジ精神などに否定的、頑固、わがまま、愚痴っぽいに肯定的割合が高く、成人群と類似した傾向はやさしさ、落ち着き、親切の項目である。老化の兆候では白髪、感覚・筋力の機能低下さらにやる気・動作緩慢・姿勢など。食傾向では三食規則的な摂取は成人群に目立ち、栄養80%・安全性49%・経済性46%、学生群は食べ易さ57%・栄養54%・香味41%に集中。食に係わる不安要素は成人：学生群で癌・生活習慣病など病気が51：63%、咀嚼・嚥下力減退44：50%が共通して高く、成人群が調理が面倒、簡便食44%に対し学生群は栄養不足50%で相違が目立つ。総合的な将来への不安はいずれも80%が意識し成人群の寝たきり、経済、呆け症状、配偶者との死別が目立つのに対し、学生群では経済、仕事について、孤独、友達づきあいが63%の高率を示す。今回群別の意識差を認めると共に多様性を知り、生活情報・福祉教育への示唆が得られた。